

# 明治二年三田の百姓一揆

明治二年、三田で大規模な百姓一揆が起こった。ただでさえ窮乏を極める農民達の暮らしが、その前年には水害が発生し、農具までも質にいれていったほどらしい。食べるものはと言えば、粟や稗の団子。現代の我々には、見たこともなければ食べない食べ物だ。上質の三田米を栽培している人達の食べるものではない。現代のように機械化されていない過酷な手作りの



現代社会の労働運動の様である。既成の労働組合のある会社組織ならそれほどでもないが、まったくその存在しない会社では恐ろしく緊迫感を伴うものであろう。しかし現代で

肉体労働作業。それでもおいしいお米にありつけない腹立たしさ。積年に及ぶ支配者層への不満と憤り、またこのさなか、知事九鬼隆義は、あらたな学校をつくらうとする。『またわれわれの血と汗の結晶の米を吸い上げようとするのか？許せない！』なぜこんな運命に生まれてきたのかと自分達の不運をただ嘆いているだけでは、事は進まない。「立ち上がれ！集まれ！」と誰が先に声を挙げてくれるか。タイム

は、支配者階級は、その命まではとうとうとほしない。この時代で「立ち上がれ！」の声をあげる事は、それは即、死を覚悟するところから始まる。仲宗左衛門この人がその人物だった。名前からして農民らしからぬこの人は、かなりのインテリで心学と言う学問の教鞭をとっている人であった。心学とは神道、仏教、儒教を融合させたもので、庶民向けの精神修養の為の学問である。さすがは心学の教師だけにその指導とすると、死者は一人も出さずに終わったらしい。が、朝野家に伝わる風聞記を読んで見るとそんなきれいな話ばかりでは収まらなかった様だ。暴徒化した農民の集団は、略奪、破壊を繰り返した。だが、結果として百姓一揆は成功に終わった。農民側のほとんどの要求は受け入れられ、九鬼隆義のかねてからの希望であった英語学校の創立は不発に終わった。(これは、親交のあった福沢諭吉の進言により着手しようとしていたのだが。) こうして、九鬼

隆義は三田での英語学校を断念し、廃藩置県後、その夢を果たそうと神戸に出て行き、神戸女学院などの学校を建設した。が、百姓一揆のその後である。約二年間、仲宗左衛門は獄中の人となる。最期は、絞首刑に終わった。逃げ場のない明治政府の権力による命の剥奪。胸につきささるほど悲壮で恐ろしい事件だ。どうして殺されなければいけないのか？彼は反逆者なのか？この時代に生まれたのが不幸の始まりだとも言えるだろうが、まるで、キリストの「一粒の麦がもし地に落ちて死ななければ、それは、一つのままです。しかし死ねば、豊かな実を結びます。」の言葉を知っていたかの様なまごとな生き様。自己犠牲の精神。幕末の三田で九鬼隆義及び小寺泰次郎、白洲退蔵は藩の財政再建に貢献したとして、評価は高いが、領民の幸せは棚上げだったのではないだろうか？この事件は、三田藩最後の不祥事だといえるだろう。(文・会員・種村 好)

## 鍵屋重兵衛文庫

# 朝野のおぼあさんの絵本

当会会員の朝野さんが平成十三年から刊行した人生の記憶エッセー「朝野のおぼあさんの絵本」の中から今後何回かに分けて連載いたします。初回は第一巻の巻頭に飾られた神戸新聞の紹介記事を掲載します。

三田市三田町のほんまち通りセンター街で金物店を営む朝野久恵さん(76)が、昔の出来事や地元への思いなどをエッセーにまとめている。題して「朝野のおぼあさんの絵本」。これまで20編近く完成し、郷土史家にも好評という。朝野さんは「まだまだ書ききたいことがいっぱいある。昔の三田のよかったところを忘れないように、これからも続けたい」と話す。朝野さんの店は、江戸時代から「鍵屋」の屋号で本町地区で営業している老舗。一八六五〜七三年にかけて店主が記した「諸事風聞日記」など貴重な資料が残っている。現在、地域の商業史を知ってもらうため、店舗の一角に資料室を設けている。エッセーは「私の記憶も文章にしておけば後で役立つかもしれない」と、昨年六月から書き始めた。一作目の「ホテル」は、子どものころに武庫川の堤防でホテル狩りをした記憶を書いた。「消え行く古い一軒の町屋」では、商人宿だった地域の建物が取り壊される直前、古い家財道具を譲り受けた時の思いをつづった。文章は知人にワープロで打ってもらい、写真も多用している。エッセーは知人の作品と併せて小冊子にまとめ第七集まで完成。毎回百部ほどコピーし、近所や三田の歴史を学びたいという人たちに配っている。朝野さんは「地元のまちなみを保存できないかという思いや、昔は芸者さんでにぎわったことなども書いてみたい」



# 九鬼奔流通信

2008. 夏

Vol.006

発行：NPO法人 九鬼奔流で町おこしをする会

## 二〇一〇年川本幸民生誕二百年に向けて

# 取り巻く環境が整って来た

## 北康利氏、「蘭学者 川本幸民」を発刊

六月末、PHP社より北康利著、『蘭学者 川本幸民』が発刊されました。当会は写真提供や編集者現地視察の案内などのご協力をさせて頂きました。が、お礼として十冊の本を送って頂きました。早速、市長、副市長、教育長に手渡ししましたが、大変喜んで頂きました。



## 教育委員会が「川本幸民物語」を発刊

それもその筈、今三田市では「歴史遺産を活用した町づくり」の一環として、地域教育・郷土学習を主眼として「ふるさと

読本」として三田の偉人伝シリーズの発刊に取り組んでおり、丁度時期を同じくして第一作目の『川本幸民物語』が発刊されたばかりでした。早速市長は同書を持つてきて、こんなに良いのができたよ、手放しで喜び、三田が生んだ偉人、川本幸民への理解を深めたいとのことでした。この本は文章は当会副会長の高田氏が、絵はヌーベルキリ絵の会がそれぞれ作成、ブック・デザインは当会の小川氏が担当、最終的には教育委員会が全体のチェックを行って完成したものです。

教育長も、川本幸民を三田の教育の原点にと、大層意気込んでお話し頂きましたが、夏休みには「川本幸民に学ぶ、さんだ子ども科学教室」が企画されるなど、早速実行

に移されており、頼もしい限りです。



## いよいよ三田も全国区

七月十日に行われた神戸新聞社主催の地才地創シンポジウムで北康利氏が「三田が生んだ偉人と地方復権」と題して講演を行われましたが、その中で『白洲次郎』のNHKドラマ化は着実に具体化されており、規模はだんだん大きくなり、今の予定では九十分、3本で話は進んでいるとのことでした。また、大映での映画化が決定されたとのこととす。

八月二日の三田祭り花火大会へヒョッコリ北康利さんがお子さんと共に会場へ現れ、ニコニコしながら「九月に六本木ヒル

ズで川本幸民の講演を頼まれました。いよいよ川本幸民も全国区ですよ」とお話しして下さいました。また、八月十日に頂いたメールでは、舛添厚生労働大臣が『蘭学者 川本幸民』への書評を書いて下さったとのことと、その記事を送って下さいました。

私も、要人にお会いした時には必ず、『九鬼奔流』のパンフレットや当会が作成した資料やパンフレットなどをお渡しすることにしていきます。六月二十一日には鳩山由紀夫氏に、八月六日には菅直人氏にパンフレットと『川本幸民物語』、『小寺泰次郎』の冊子をお渡ししました。

菅直人さんは興味深げにパンフレットや冊子をご覧になっていましたが、これらの人々によってどのように情報が伝わっていくかを楽しみに見守っています。

## 舞台は着実に整っている

このような中で、九月十四日は川本幸民祭りが計画されており、当会は三田学入門講座の初日のイベントとして、大阪大学名誉教授・適塾記念会理事の芝哲夫先生をお招きし、『蘭学者 川本幸民』の講演と関連した地域を巡るウォーキングを計画しています。また、国際交流協会は国際交流プラザ魅力発信事業として、講師・旭堂南陽さんをお迎えし、『九鬼秘伝』海を求めて」と題する英語講演を計画しています。色々な会が三田の歴史に興味を示し、その活動の中で取り上げ、色々な企画をするようになってきたように思います。二〇一〇年の川本幸民生誕二百年祭に向けて、着々と舞台は整って参りました。

更なる発展にはコーディネートが必要だ

来年四月から六月にかけて、兵庫県とJRが主催で行われる広域観光キャンペーンが予定されています。北康利さんの小説『男爵 九鬼隆一』が九月に出版され、来春には、NHKテレビドラマ『白洲次郎』が終了した直後で、三田は益々全国から注目されるでしょう。

このような中、川本幸民祭りをより発展、充実させるためには関西学院大学を含め、各会が一致協力して盛り上げていくことは勿論、夫々の力を引き出し、結集させるコーディネートタの存在と、目玉となるイベントが必要です。コーディネートは行政に見つけて頂くこととし、目玉のイベントは、科学技術の祖たる川本幸民に因んで、ノーベル物理学者、小柴昌俊教授による中学生向け講演会を提案します。三田には関西学院大学理工学部があり、テクノパークには優秀な技術集団があります。技術立国日本を支える科学技術教育先進地、三田を目指して頑張ってくださいと願っています。(文・事務局：野上和雄)